

白雲山房

584



K 295.3
485

左の四萬温泉の詠歌は正三位子爵福羽美静のきみより特に贈られたる自筆をその儘木版に附したるものなり

志まの温泉

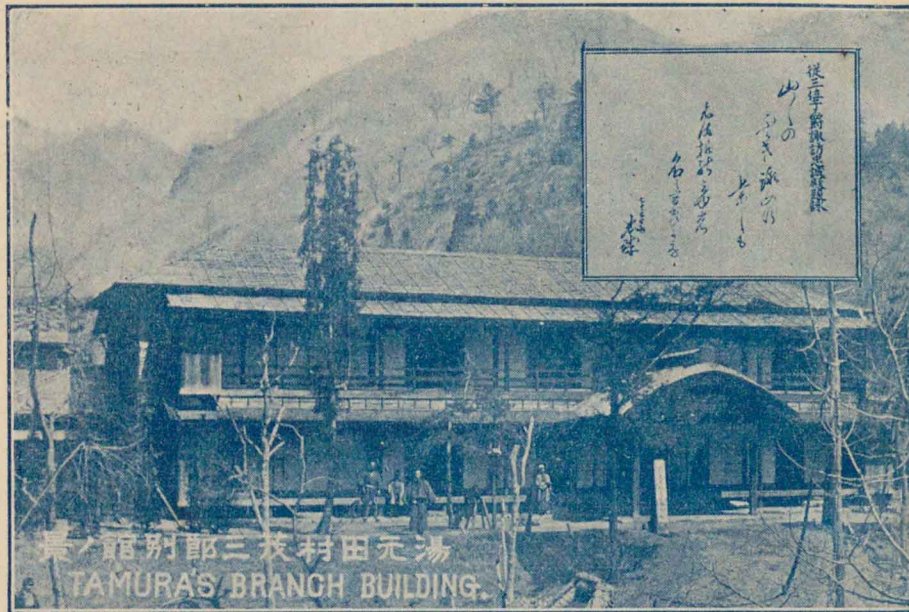
元山人美静

志まの温泉をわきて今よりたの
しむのつて湯のささのよま
おもひてさうり出でてとて毎
来る人今も志まのつて湯を

正 誤 表

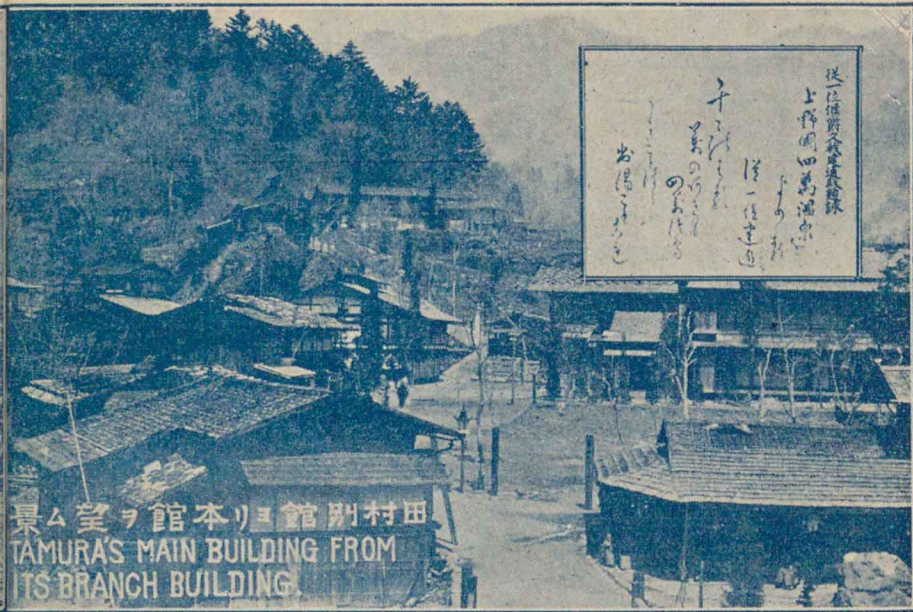
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|------|------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|------|-----|----|------|-----|----|----|
| 〇三十九頁八行ヨリ四十頁ニ至ル製 札寫ハ二六頁ノ次キ古地圖ノ次 へ入ルへキモノ | 頁 | 九 | 十 | 同 | 十二 | 同 | 十四 | 二十四 | 同 | 二十六 | 三十四 | 三十七 | 三十八 | 三十九 | 同 | 同 | 同 | 四十 | |
| | 行 | 六 | 十 | 十一 | 十二 | 二 | 七 | 五 | 三 | 一 | 三 | 五 | 三 | 五 | 三 | 十 | 十 | 五 | |
| | 誤 | 俗 | クカヤマ | 黒岩水品 | 淺見 | 元錄七年 | ■山下の | 快出 | 迄 | 前之通 | 野茶 | 湯の壺 | 内外服用 | 紂慣 | 入俗 | 内服 | 朝夕共 | 益夜 | 相過 |
| 正 | 浴 | イナツ、ミ | 水品 | 淺貝 | 天保十四 | ■山下々 | 帳 | 近々之通 | 前々之通 | 野菜 | 湯壺 | 内服 | 習慣 | 入浴 | 内服 | 二行不用 | 晝夜 | 相廻 | 明和 |

正誤表
 三十九頁
 札寫ハ二六頁ノ次
 へ入ルへキモノ



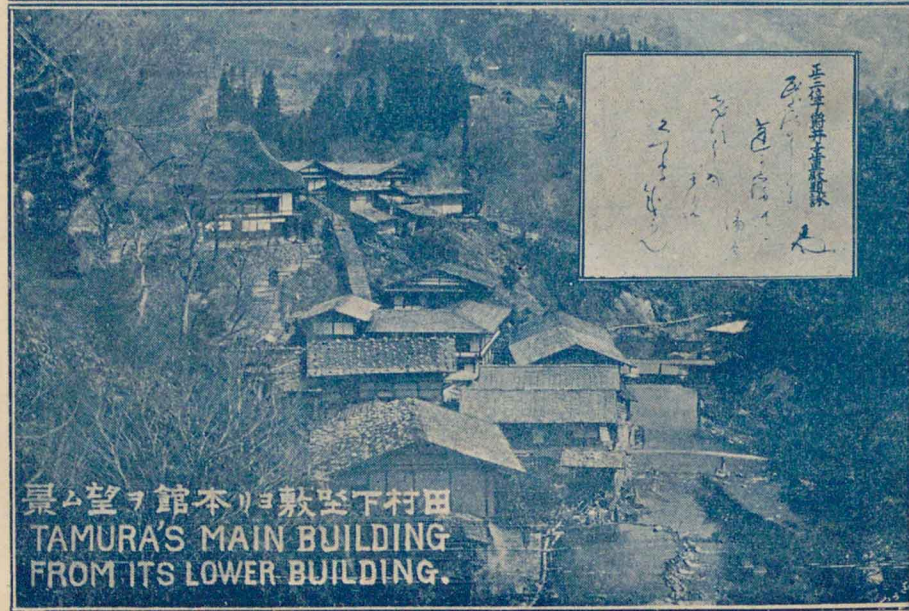
從正保野金澤鐵線
 山ノ
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線

景ノ館別館三茂村田元湯
 TAMURA'S BRANCH BUILDING.



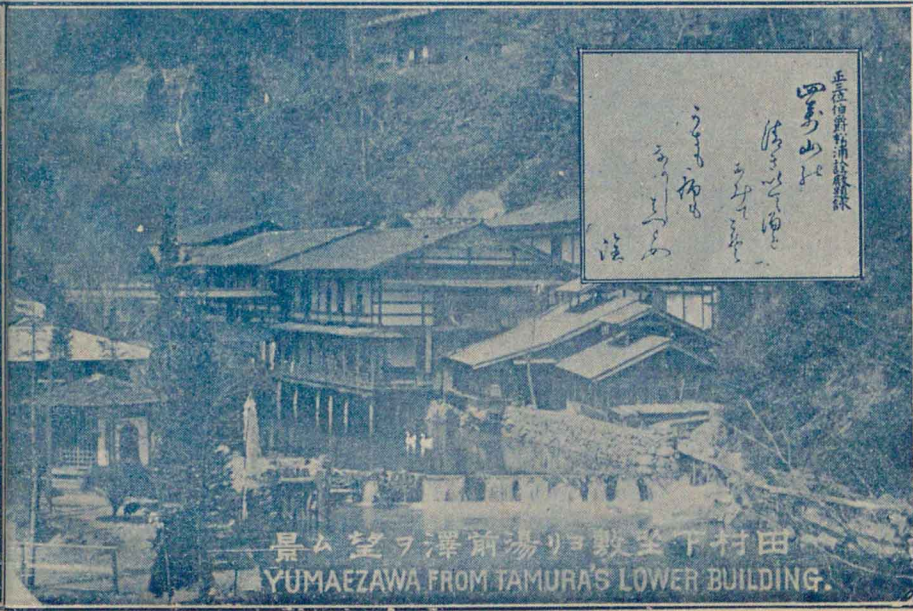
從正保野金澤鐵線
 上野園四萬湯泉
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線

景ノ館本館別館村田
 TAMURA'S MAIN BUILDING FROM
 ITS BRANCH BUILDING.



正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線

景ノ館本館敷地村田
 TAMURA'S MAIN BUILDING
 FROM ITS LOWER BUILDING.



正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線
 正保野金澤鐵線

景ノ館澤前湯別館敷地村田
 YUMAEZAWA FROM TAMURA'S LOWER BUILDING.

緒言

指かゝなふれは早や三年の前よてありき、われ多くの名勝古蹟が、日を追ひてますます頽れ荒み、また名あるものゝ埋れ果てゝ世の人の知らざるをいたく嘆きて、荒れあるは起し、埋れざるはあぐはさんと、おぞくも思立ち都に名ある歌人學者達にはかりて、名勝雜誌社といふものを起せりき、この時よ、彼の上野國四萬温泉のあるじ田村茂三郎ぬしは、いたくわれが志をよろこびて、ねもごろの文をおこされ、この事わぎを助け玉はりぬ、この時かのいでゆの埋れつゝあるを惜まれて、世よあらはさんことを乞はれぬ、これぬしと親しく交はるの始めにして、うれよりいよく往さくるさの雁の便り、さては相見ての後はいやまゝにぬしのいつくしみ深きに感して、われは第二の父ともお

もふ様になりもて來ぬと共に、如何にもして、かのいでゆを世にあらはさんと、或は雑誌に筆をとり、またはうちこちの歌會などに罷り越しては、語りきかせなどいつゝある内に、何時か年月もたちて、ことゝ二月になりぬ、ぬゝの便りに是非とも温泉の事績をくらべて、一卷となし呉れよといふ、などかいなむべき、さうくにこの夜より古き書どもをくりかへとはじめぬ、これこの書の成りと濫觴なりけり、去れどわれ未だ人生の半を過ぎず、見聞に淺きのみならず、學の道にうときものから中々心に心苦しく國史を見、古人のかゝれたる漫筆をさぐるなどこれがためにふみを見たる數も幾百なるべしや、一枚一枚をくりかへと見る事故、枚數にせはまこと幾万といふよ眼をさらしたるなりけり、かくしてやうく得たる材料は即これ、實はつかとさ

限りにして、かくては世に出ずもうとろめたととためらふものゝ、日頃の素志もどし難く、遂にかくは梓にのぼし待りぬ、されはもとより學者に見すべき價值あるものにあらず、また語格の文法のことごとく、さくうなり玉ふきみ達に見せんとよもあらず、われは只た我かHの本の名勝古蹟の荒頽を嘆き國粹を保存せんとしたまふ同志のきみ達の見んことを願ふものなり、而して、自らもりの地をふみ玉ひ、または世に持嘶し玉はりて、ますくこのいでゆの世にあらはれ榮江行かんとを、切に希ふものなり、あなかりこ、

明治卅一年

於帝國圖書館階上花の上野に浮かれ遊ぶ

四月十六日

男女のむれを見つゝ花笠庵のあるじ

石倉重繼 志るす

四萬温泉誌目錄

- 一四萬温泉の沿革(古地圖挿入)
- 一四萬のいでゆをよめる歌及詩文
- 一四萬温泉の各分析表及効能
- 一四萬温泉入浴の心得
- 一四萬温泉紀行 花笠庵翠葉記
- 一四萬温泉の名所及名産
- 一英文四萬温泉案内
- 一四萬温泉宿の案内

附 錄

風景畫及案内地圖數種挿入(著者自畫)

四萬温泉誌

著者 石 倉 重 繼

四萬温泉の沿革

四萬温泉は上野國吾妻郡澤田村大字四萬にありて、東京より四十里を隔ち西北にあり、南
北山を帯び南西川を隔て、山に對し海面より高さ事二千〇〇五尺なり、風光閑雅幽邃にし
て、仰ては蒼翠巍峨たる峯高く雲霧の表に聳ゆるを見べく俯しては碧流漾々として綠愈々
濃く或は巖に激して聲雷の吼ゆるが如く散りて珠と成り雨となりまた霧となり或は水波穩
かにして琴瑟を調ぶるか如く或は巖より水の噴出するを見るべし况んや靈泉混々として涌
き出づるをぞ、眞に得難きの仙境といふべし、然して世人多くこれを知らず、垢塵紛々の
間に身を投じて以て消暑の法の至れりと爲せ、豈見聞の狹にして愚の甚しきや、雖然これ
強ち世人とのみ咎むべきにあらず、惜しむらくは地山間の僻邑にあるを以て、其價值と光
彩とを放ち能はざりしかため遂に不遇に陥りし所以なり、去れど今や明治の盛世となりて
この不遇の一名勝も日を追ふて世に喧傳せらるるに至りたるは實に嬉しき事といふべくま

た當然の理なるべし、茲に余は多くの舊史雜書を參考して、聊かこれが沿革を述べんと欲す、四萬の志麻又の四萬とも書し、しまと讀み歌には多くしまねといふ、夫木和歌集神祇伯顯仲の歌に、

よとしも下にたく火は無けれどもしまねのみゆはさむるともなし

とあり、これこの四萬をよみたるの歌にして最も古きもの、而して余は此沿革を述ぶる前に少しく此地のある國郡の起原を語るべし、上野國は四面山を以て圍まれたるの國にして讀むでかうつけのくにといふ、昔は毛野國といひしを後上毛野、下毛野の二つに別つ、舊事記、國造本紀に云

難波高津朝御世元毛野國分爲上下、云々

とあり以て證となさべし、安閑紀齋明紀等には上毛野國と書けり、下毛野國とは即今の下野國なり、萬葉集十四卷の上野國歌にも、可美都氣努、可美都氣野と書けり、然るを上野と二字に書く事は

續日本紀和銅六年五月甲子の詔に

幾内七道諸國郡郷之名好二字

とあり又。

延喜民部式に

諸國部内之郡里等之名並用二字必取嘉名

とあるを以て考ふれば此時上毛野といふ毛の字を略さしものなるべし

因云、此説は和字正濫抄、古事記傳地名字音轉用例、諸國名義考等にもいひり

尙云、此上野國の事に付きて考證せんとおもはゞ、景行紀、推古紀、萬葉集、後撰集、類聚國史、和名抄、古事紀傳、閑田耕筆、南留別志、日本風土記國名、不問語、州名紀原、上野名蹟考、上野國志等の諸書を見るべし、こゝにはくたくしければ考證することを止みぬ、

左に上野國を詠める古歌を示めすべし、

萬葉集十四卷に、(上野國歌二十二首の内)

可美都氣努、麻具波思麻度爾、安佐日佐指、麻伎良波之母奈、安利都追見禮波、

因曰云麻具波思麻度爾の麻具波といふは地名にて、其まくはに川島などありて其渡瀬を門にいへるか而してこゝは朝日に匂ふ所と見えて、ろの朝日のきらりとするにたとへてよろに戀し男に今は常に相戦ひ居ればまばゆしといふ意なるべし、在りつゝもは常に在りてなり、

扱吾妻郡とはあがつま郡と呼ぶ、

和名抄國郡部に、

吾妻、阿加豆末

延喜民部式に吾妻郡

上野名蹟考に

吾妻は吾は縣、妻は傍例あるべし、縣の端か、亦是縣約の義ならん、山間の郡縣なりといふ云々

とあり、而して良田義郷の著せる、上野國志にも(五冊本にして安永三年八月十九日著)や、取るべき説を述べたり、

上野國志三卷に曰

吾妻郡、和名抄云阿加豈末、

日本武尊東征の時碓日の坂に登り賜て、弟橘姫を忍賜ひ、吾孀耶、とのたまひしより、山東の諸國を吾妻と稱すと日本紀に見えたり、而して此郡山東の郡縣に於て最も西に居る、因て吾妻の稱を專にすに見えたり、云々、

依之は、本郡を稱呼するの起因を知りぬべし、四萬とは讀むでしまといふ、前掲顯仲の歌のしまねのみゆのしまこれなり、而して、温泉とは俗におんせんにて和歌にはこれをいひていひて和名抄に、「温泉、一云湯泉、和名由、」とあり即ちこれを訓みて伊傳由といふ支那にての温湯、又は沸泉といふ、我國にて温泉に浴して病を治療することは既に神代よりありと見えて、

古史傳卷十八に

爾大名牟遲神遠延而、伏之時、少昆古那神、欲活之而、以大分速見湯、自下樋持度來而、漬老則、有二整間一而、活起居然、詠曰眞整寢哉而、踐健之跡處於今存湯

ナカノイリノヘコ、イヨクノコノイテユコレナリ、カレアハレミヒトクサンヤマヒシランカミアイハカリテハシメタマヘスリユノミチキイツ
中之石上、伊豫國之湯泉是也、仍憫人草之病、二柱神相議而、始製藥湯術一矣、伊津
カミユモ、タソノカスニテ、ハコチノヨトコノナリ
神湯又其數而、箱根之元湯是也、云々

とあり、即今の豊後國速見郡赤湯泉ならんか

(古史傳、豊後國風土記參考)

因云このことに就きて詳細に取調べんとおもはば、荒木田久老の校合せる註豊後風土記
平井温故の撰める豊後志〇〇其他合せて九種類あり、茲には用無ければ敢ていはず、如何
となれば然詳細に述べんには全くの温泉考となりて、四萬温泉誌の意向にそむけはあり、
而して、此温泉に行幸ありしことは恰も今年より一千七百年ばかり前、景行天皇の御時な
りとあれど正史にはあらで據も無し、去れど正史に見えて天皇の温泉に幸ありしは今より
一千三百七年前舒明天皇の有馬へ行幸ありしを嚆矢とすべし、

日本書紀、舒明天皇之紀に

三年秋九月丁巳朔乙亥幸千攝津國有間温湯一

其後八年を経て、十一年冬十二月伊豫道後の温泉に幸あり(日本書紀及平田鏡胤(篤胤の男)の古史傳註參考)うれより後紀伊國牟婁の温泉に幸あり(今より千二百四十一年前)これより年を経て諸所

に温泉の發見せらるゝありてますゝ温泉の奇驗あるを稱するに至れり、而して四萬の温
泉は何時の頃より發見せられしやといふに、古來よりの言傳に依れば延暦三年坂上田村丸
の東夷征討のたり一老翁の告に依りて發見するところなりと、去れど此說逸乎として正史
上に見ねば惜しむらくは斷言するを得といひども數百年來これを信とし置くのみあら
ず、上野國志にも此事を信とし置くか如く、また諸所の温泉縁起にも概ね如此發見者の
未定なるもあれば強ちに發見其者を深く探くるにも及ばざるべければ(舊史上に載りありて其說
難きもの、如きはもとよりいふまでも無く何處迄も歴史
と地理との關係より論及して決斷すべきは勿論の事なり)茲には姑く此地の温泉縁起、舊記、古記録、及
び上野國志に掲載しある温泉記等を並べて著者の疑問に附し置くべし、而して延暦三年の
發見を信とすれど(内務省衛生局編纂の日本温泉誌に、田村丸の發見とあり定めて根據ありての上なるべし)即延
暦三年甲子は今より一千百十五年前にて桓武天皇の朝なり、

上野國志卷三に

上野國吾妻郡四萬村、處乎重山複水之間、群嶺回抱、遼絕幽邃、若不與人世通者、而
屋宇相望人物阜饒、宛然一村落、晨烟夕炊、與紫風蒼靄、飄飄乎雲際、其民含哺鼓腹

不假耕鑿、垂髻戴白、熙々有太古之風者蓋賴地有溫泉之利、泉湧于岩穴之中、不知其數、延之槽、停而爲池、又設蔭室、竹席架其下、使熱氣上蒸、以便浴者、而其浴者、蠲沈痼、除宿疾、其快如釋重負、其効如合信契、是以四方源々而來、歲多月繁焉、而地勢之阻、峰巒四繞、澗水注其間、成長水流、潺々觸奇石奔、淺瀨自然之韻、有出于琴瑟笙竽之外者、亦以湔腹而療俗肺矣、蓋造物者之於斯人也、猶慈夫之育赤子、生之禾黍菽麥、以養其性、生之桑麻苧纊、以暖其肌、弱者扶之以魚肉、病者濟之以醫藥、而尙以爲未足焉、又爲之凝嶽瀆英精蕩金之靈液、發爲溫湯、以救民疾、豈然也哉、況如此山、其來甚遠、首尾蔓延、亘數千里、蜿蜒磅礴、鬱結噴騰、吐雲霧藏風雨之餘、洩爲此泉、以資生人、其爲利也不亦大也耶、寶曆甲戌之秋、與今村寬能、山岸信任、沖賴恭、小倉公敬、保岡正辰等、自前橋同遊四萬山中、以浴于此留十有餘日、神清氣爽、支體輕健、旣獲溫泉之利、且愛山水之勝、翫賞不忍去、因記其事以備他日之感、且以告後人、柳子有詩、誰爲後來者、當與此心期、予於此山亦云、是歲八月初四日、又該溫泉場のあるじ田村茂三郎氏の家に秘藏せらるゝ溫泉緣起を見るに左の如し、

四、萬、溫、湯、之、緣、起、

(口ハ原文不明)

上野國、我妻郡四萬郷之溫泉者、昔日延曆年中、坂上田村丸、東夷爲征討、來斯邦、巡守而至斯處也、時有一老翁、著青衣、峨冠、而忽然、來田村丸之前、告曰、吾是寓此山中神也、然斯處有溫泉、靡世人知之、想夫倭國溫泉雖多、恐不降二三焉、故我守護之、年尙矣、口將軍該地溫泉并令、安置於醫主、復是、善逝之像而救療、入湯者之病苦矣、然則武功播天下、可爲八福田、耶音畢乃、不見、田村丸、即狗老翁之言、往見山中、果有溫泉焉、湯々乎出於谷久矣、其涌花也、四萬所焉可俗也、可蒸也、有淡味焉、有鹹味焉、煙立匂散、噫能治百病不可勝計固是無雙之溫泉也、於是田村丸、便摸範躡山之華清宮而權輿四万之入湯場、加之堂構於溫泉之上、而以傳教大師所作三藥師如來像、安置于此矣、而後其堂、雨濕風磨因匠石蓮片堅固已向六百餘年矣、然方、天文永祿之乱、而其堂悉敗壞矣、只最澄正作之不動像嚴然遺于今焉、又傳昔探溫泉之出而各郷曰、四萬領田村之姓囑郷人而司溫泉也、夫田村丸乎於東夷防於惡魔措天下於泰山之安、或基於溫泉醫於病痼居人間於丹丘之樂可謂社稷之臣、又是大士之佛力也

、吾以如斯、有前代之口碑、乃勒於温泉之記、而傳乎後代之人焉耳、

時元祿十四次歲辛巳春三月吉旦

而して此地の事につきて舊史に記るされたるは、左の如し

上野國志に

四万村

温泉三所あり、山口、荒湯、日向、各相去る事數丁、山口は入浴なり、荒湯は蒸湯なり、湯の氣味似たり、並に吾妻川の涯に出つ、日向は白礬の氣あり、腫物に宜し、日向は藥師あり、古き堂なり、本堂は秘佛あり、この堂を定光寺といふ、人家たゞ三軒あり、浴する人稀なり、

此邊の高山、クカヤマ、コクラ、コシヤウ 甌岩など云皆大山なり、

水昌岩あり、黒岩水昌生ず、

四萬は西北の隅なり、之より五里計り山中に越後の界あり、ろれより淺見へ一里あり、昔は茲より越後へ通路せしと日向より三里ばかり奥に杵野宿といふ驛の趾あり

、道險なるゆへに其路絶たりと云傳ふ、

吾妻川はこの山中より二派出る、一は荒湯川、一は日向川といふ、

これや、四萬の曆史の詳細なるもの、

因云、甲陽武鑑、武田三代記に左の如くあり

甲陽武鑑に

天文十六年武田晴信入道信玄信州上田原合戦に村上義清か爲めに疵二ヶ所付られ
三十日しまの湯に入りて疵癒申云々

武田三代記

天文十七年七月鹽尻合戦に信玄薄手疵三ヶ所蒙ふり玉ふ、其内腕は矢疵なり、直
にまの湯に入らせられ十日許の内に手疵平癒まし〜けると云々

雖然よく〜これを甲斐、信濃の舊史雜書或は名跡志等に探るに甲斐の國に今巨磨郡内に
し、まといふかあり上志摩、中志摩、下志摩、内に温泉ありて中〜に入浴者もありとの事
にてまた、同國の某友人に聽くに今も尙ほありといへども確然たることい言ひ難し、暫く

疑を存し置くべし、而して此四萬温泉に數種の記録あり、發見以來變遷の如何を知るに最好材料と信ずれを左に掲載すべし、去れと惜むらくは元錄七年の火災のために其以前の記録文書は多く烏有に歸せり故に今残れるもの、みを左に掲ぐ、

相渡申手形之事

河向芝付河原之内少々湯出候處有之其方湯場に取立度由被申候依之御代官様御越し之節右之場所御見分に入所成程能湯場に候間湯小屋可作所無之に付我等持分の山下の畑十六歩之所其方所望之節は其方名所に御付可被成候爲後日如件

元錄五年

湯守 彦 左衛門 ④

壬申十月十五日

全 茂 左衛門 ④

善兵衛殿

湯守彦左衛門とは今の田村源太郎氏の家にして茂左工門とあるは今の田村茂三郎氏が祖なり宛名の善兵衛とあるは今の關善平氏の家なり(即此書の事、今より百〇七年前なり)

其後二年を経て元錄七年代官に向かつての言上書あり、事技葉にわたれども此書に依て同時代の人情風俗の朴直にして天真爛熳たるを察するに餘りありといふべし

指上申口上書之事

當村之内荒湯川向芝付河原之内に出湯御座候に付名主善兵衛見立置三年以前申年御代官様へ奉入御見分之所に則善兵衛湯場に取立候様にと被爲仰付候に付去年中より當春迄少々湯場取立湯小屋も出來仕候間何卒當年より屋敷御年貢上納仕度由善兵衛奉願候間御改被遊右之屋敷に當年より御年貢被仰付可被下候以上

四萬村名主

善兵衛

元錄七年戊ノ八月

| | | | | |
|----|---|---|---|---|
| 湯守 | 彦 | 左 | 工 | 門 |
| 組頭 | 茂 | 左 | 工 | 門 |
| 全斷 | 吉 | 左 | 工 | 門 |
| 全斷 | 太 | 左 | 工 | 門 |

全 斷 半 兵 衛

御 代 官 様

其他天和二年の古文書は左の如し

指上申一札之事

一當湯場湯錢取立て之儀當分快候共被仰付候名主年寄百姓致吟味前々之通急度取立
上納可仕候尤湯人之義當座に帳面記其宿に判形いたさせ可申候壹人成其隠候て御後
聞き儀申上間敷候

一湯人駄賃錢之儀御定之通之外一錢成共仕かけ取申間敷候駄賃馬之儀ハ百姓中よて順
に出し申駄賃取可申候且又依估仕候て馬出し申間敷候

右之通隨分念入相勤可申候其外被仰渡候趣堅く相守可申候若相背候はし如何様之曲事
可被仰付候爲其手形仍て如件

天和二年戊辰年四月三日
四萬村名主 善 兵 衛
組 頭 四 兵 衛

湯 守 角 右 衛 門
全 彦 左 衛 門

御 代 官 様

而してこれより前にさかのぼりて今より百十九年前即天和三年該温泉場の湯錢取立帳といふものあり趣味あれば左に掲ぐべし

〔因云此版本は即取立帳の表書を其儘寫し取りて木版に附したるものなり〕

天和三年

湯錢取立帳

新湯

三月廿日

湯守宿

(●は印形と知るべし)

三月廿五日

一安中の者●

但し五人

市郎左工門

同廿六日

一惣献者●

但し二人

佐右工門

同廿七日

一前橋者●

但三人

市郎兵衛

同

一江戸者●

但一人

捨五郎

廿九日

一ふかや者●

但五人

七郎兵衛

四月朔日

一やまな者●

但六人

次郎兵衛

同二日

一前橋者●

但三人

三右工門

四日

一高崎者●

但五人

八左工門

六日

一とよ村の者●

但五人

八郎兵衛

十三日

一半澤者●

但四人

勘兵衛

同

一八満山者 ●
但二人

半兵衛

十四日

一高崎者 ●
但三人

清兵衛

十四日

一中山者 ●
但二人

次郎右工門

十六日

一おしの者 ●
但一人

彦兵衛

同

一おはた者 ●
但四人

傳右衛門

二十一日

一日田の者 ●
但五人

鶴右衛門

六月三日

一みのわ者 ●
但三人

徳兵衛

六日

一いたはな者 ●
但二人

次郎右衛門

三月二十七日

一壹本木者 ●
但三人

半三郎上納

二十八日

一板鼻者 ●
但三人

惣右衛門

利左衛門

同

一右同所者●

但四人

惣十郎

四月二日

一みのわ者●

但四人

市之允

宿六之丞

四月四日

一行田者●

但四人

善右工門

五日

一同所者●

但四人

豊左工門

以下略

此他享保年間及延享年間の古文書を左に例記すべし依之聊か當時の狀況を知るを得幸甚

なり

乍恐以書附奉願上候

一上州吾妻郡四万村谷河之岸通に往古四万所々温泉出候に付當所を四万村と名附近里遠郷之者入湯仕候處に乱世之節に罷成通路成兼湯治之者一切無之温泉之場所年久敷癢申候然所御入國以來拙者共先祖右温泉之舊跡穿鑿仕其節之御領主真田安房守様に委細御注進申上候得御見分之上に直様御修覆並に往來自由相成候様に被成下則拙者共先祖之者共に湯守被仰付並入湯之者不自由無之様に宿等迄可仕旨御書附致頂載只今拙者共迄無斷絶湯守湯宿等仕來候御事

一當所に入湯之儀毎年四月より八月中旬迄所より湯治仕候其間湯に當り急病人も有之或之口論等出來仕候に付爲御仕置真田伊賀守様御領分之節より御支配役人御付被成入湯之者人數に應じ湯錢御取被成候處に當五十年程以前御知行替り御座候て當村御料所に被成右之湯錢御救免被遊依之新湯屋敷壹反歩永三百文山口湯屋敷壹反歩に永貳百文代御年貢被仰付候間其旨相心得可致湯入之宿に惣て湯場諸色入用等も湯宿之者共可出之且又仕置之儀

は名主善兵衛本村に引越罷在湯守之者共等相談之上萬事滞無之様に可致旨被仰付難有奉
 存候然所に右名主善兵衛當拾八年以前病身に罷成名主役勤兼度御願申上候に付役儀御
 免被遊候依之當村之内殿界戸年寄四人にて年番に名主役相勤候間湯場に迄出し村役人無
 御座候就夫湯入之者急難御座候ても右年番名主之所迄山道百町餘に御座候間何事よら
 ず間違本村惣百姓迷惑に奉存候誠に當所本村より奥拾里餘之間人家無く越後國境之深山
 に相續故百姓農業之儀一日片時も油斷仕候得ば猪鹿猿之類多出耕作を喰荒し候所近來殿
 界戸名主宅まで百町餘り之山路公用之節其外年中節句式日相勤候儀惣百姓農業之障りに
 罷成困窮仕千萬難儀に奉存候御慈悲に本村高四十七石餘之處名主壹人被仰付被下置候り
 本村惣百姓並に湯宿他國入湯者迄難有奉存候御事
 右之通四万村惣高三百拾三石餘之内本村高四拾七石余之所に名主壹人御定被下置候ても少
 も村中之障に不罷成候右之旨惣村中にも相談之上乍恐奉願上候幾重にも 殿様御憐愍を偏
 に奉願候本村百姓共願之通被爲仰付致下置候は難有奉存候以上
 上州吾妻郡四万村四拾七石之所惣百姓不殘

享保十八年己七月

| | | | | | |
|------|---|---|---|---|---|
| 願人湯宿 | 文 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 半 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 八 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 善 | 兵 | 衛 | ○ | |
| 同 | 茂 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 覺 | 右 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 彦 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 同 | 長 | 右 | 工 | 門 | ○ |

池田新兵衛様
 御役所
 覺

一當所湯宿湯治之輩より湯錢一切不被取之宿賃斗可取之但向後は幾廻にても宿賃壹人に付
 鏝百文又は貳百文其人に應じ五日湯のものは五拾文此外猥に宿賃取之間數事
 一獨身之者或は非人同事之族よりは定之宿賃取間數候鏝五十文三十文相對を以逗留中取之
 又は御定之木錢斗取之不致難儀様よ可差置事

一前之通かこひ湯は金壹兩幕湯は金貳分可取之座敷間切に借り候もの之相對を以座敷賃可取之不相應之儀申かけ多く取間敷事

一米塩味噌油薪野菜酒肴其外諸色湯治人に賣候ため賣人申合高直に致べからず若猥成儀も有之ば名主湯守共可爲越事

一湯治人雇候人足賃並駄賃錢之儀相極之通可取之増錢一切取間敷事

一博奕惣て賭之諸勝負御製禁守り若違犯之輩有之は早速可申出之事

附 遊女野郎かげまの類抱置儀は勿論他所より呼候儀堅停止之事

一惣て湯治人に對非分之儀申かけ又は無作法慮外がましき儀仕間敷事

右之條堅可相守此旨若違背之族於在之者可爲越度候也

享保二十一年卯六月

池田新兵衛

定書之事

一夜着壹ツ七日に付百二十四文より百五十文迄

一蒲團壹ツ七日に付百文より百二十四文迄

一薪壹束に付代拾貳文ツ

一近年打續諸色高直に付夜着蒲團損料並薪代等湯守共相談之上相定申候然上は相定代物請取之可申候若内證にて隠密に相定之外相違成儀致候は見出聞出し次第三貫文之過料取之湯場修覆入用等に割合可申候爲後證定書一札仍而如件

延享五年辰三月

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 文 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 茂 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 佐 | 太 | 夫 | | ○ |
| 彦 | 左 | 工 | 門 | ○ |
| 定 | 右 | 工 | 門 | ○ |
| 半 | 右 | 工 | 門 | ○ |
| 善 | 兵 | 衛 | | ○ |

次ぎて天和三年五月十一日此四万温泉場の地理を實測して時の代官所へ上りし古地圖を騰寫して掲載をべし今の狀景と百十九年前の地形とを比較せを言外の趣味あらんと信ず

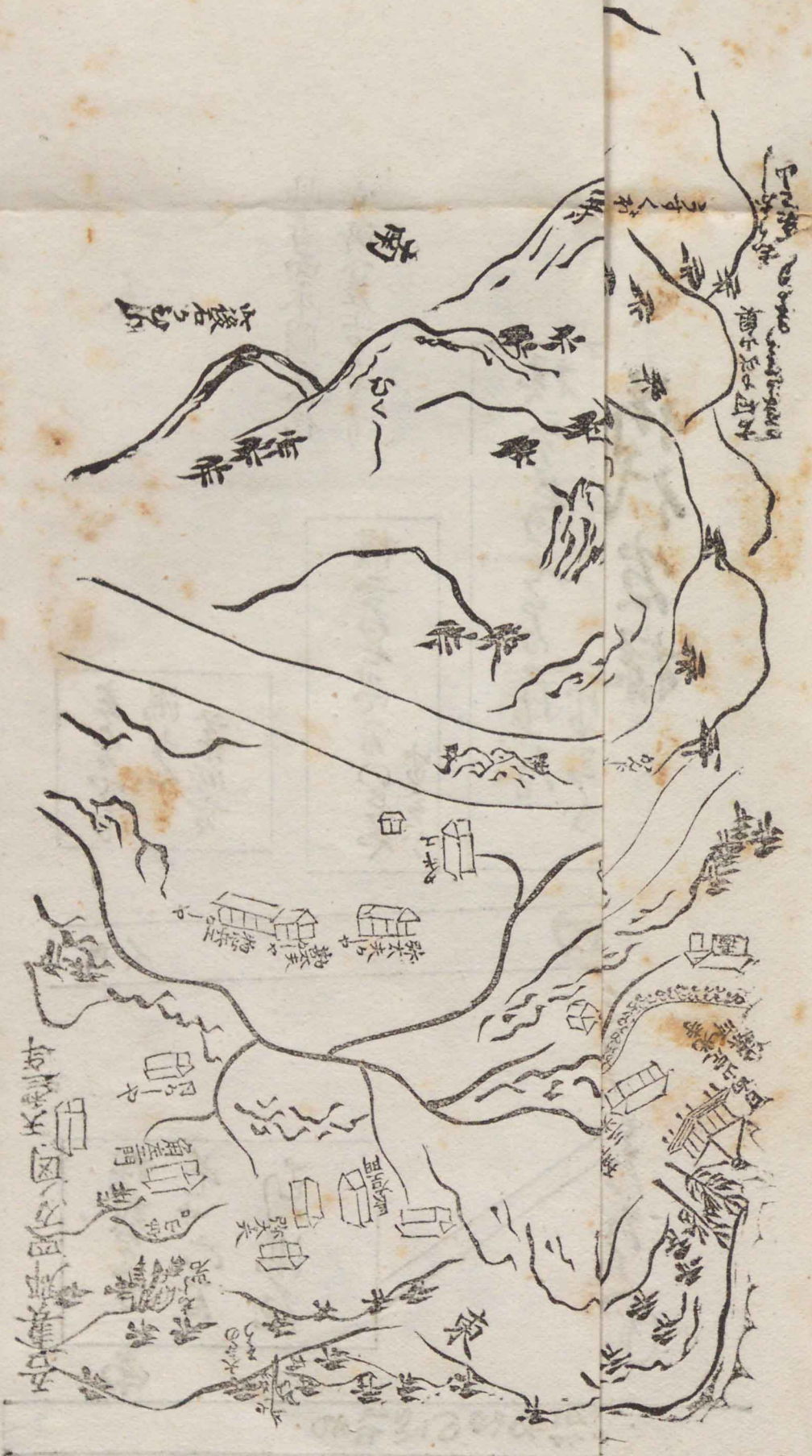
即ち左の地圖を見よ

終はりにこの地の特種とすべき蒸湯の事につきて、上野名蹟志に左の如くあれば併せ掲げ置くべし。

上野名蹟志

四万の新湯斯は蒸湯といひて湯の流るゝ上に、之し殿などの家をおもいて中にみすの子を敷たるに横入りてあふむけに伏て湯氣よ背をむすなり、湯の壺よ入るとは事かはれり、云々

これ此温泉の沿革なり去れど著者未だ人生の半に満たず従つて見聞にとほしく加ふるに學淺く智少し、誤謬素よりいふを用ゐず博識の君士希くは教に吝なからん事を著者は深く其高意を謝すると共に直ちに訂正せんと欲す (沿革終)







此書面本圖ニ添代
官所ハ差上ルモナリ

東

横敷倉
湯之
茶所

横二石七升四石の長也
中三石

横三石七升五石
中三石

横二石
七升九石
居申
中三石

横二石
七升
中三石

横二石
七升
居申
中三石

横敷倉
七升六石
山湯屋

横敷倉
七升三石
山湯屋

人

河

山

右之我書田方村新湯之繪
其湯之山方村新湯之繪

天和二年亥 六月廿日

御代安様

山湯屋
山湯屋
山湯屋
山湯屋

山湯屋 山湯屋 山湯屋 山湯屋

西

居や
きし

右を我書回可村新湯之繪巻
玉之湯之山少も備之山少

天和三年亥 云々月云々

御代友様

經双
口本温泉
口本温泉
口本温泉
口本温泉
口本温泉

四萬のいでゆをよめる歌及詩文。

四萬温泉をよめる歌よて尤古きは顯仲のなり。

夫木集

神祇伯顯仲

よとしもよ下またく火はなけれどもしまねのみゆはさむるともなし

此歌より後の代に歌人等のよめる少なきは惜むらくは山間の僻色にあるを以て名ある歌人のこれを知らざるがため、またかばかりの名所をあたら埋るゝにまかせて世に紹介するの
人無かりしがためなり、われ縁りありてこの温泉のことをさし知りてより都人に知らしめ
んと欲し、故正親町從一位(實德殿)同小中村博士(清矩殿)の遺志をつき、あらゆる歌文よ
名ある人の賛助を得て名勝雜誌といふを發行したりし時この温泉の概畧を書き記るして讀
者に告げまたは翠園(從五位鈴木重嶺翁の歌會)初め諸所の歌會に罷りては、畫圖を示めし
効能を説きなせしかを皆一度行て見んなといはれぬ去ればこれよりますます世に知られ
歌や詩や文にも書れていよく榮ゆくことなるべし、左の之われが歌を乞へしもの、ま

たは來浴してよまれしものゝ名あるものゝみを抄出せしものなり

四万の山むら雲はれて澄む月のかげも涼しき峯の松風

從一位 九條道孝

千々のたる萬のあきもしまつ島うきことはらふいでゆこそこれ

從一位 久我建通

山々のふかき詠めの上にしもしまねのみゆの名も高さかな

故正三位 訪諏忠誠

四万山の清さいでゆをあみてこそうさも病もながしつらめ

正三位 松浦 詮

民くさのしげる蓬かしまの湯は老す死なすくすりなるらん

正三位 井上正直

いく薬出湯もたぬすこれやはよもきかしまの岩根なるら舞

正五位 本居豊顯

足ひきのやまひいゆとて上野やしまのいてゆにくる人多き

從五位 鈴木重嶺

もろくのやまひをいやすしるしありて四萬の出湯は貴とかりけり

從五位 諏訪忠元

四万の湯の名さへながれてもろ人のゆきのかすもいやまさりけり

右夫人 諏訪晴子

かみつけに出湯のおほし然のあれを四万の出湯をわきてしるしあり

文學博士 黒川真頼

岩がねのかさなる山のをくなるをいかでしまとはいふにか有るらん

木村正辭

南亭絲竹北亭謳書畫琴棋樓又樓萬客浴餘苦無事風流枉做百般遊

三島中州

溪水躍珠下碧灘靈泉洗熱旅魂安暮山霧散峰々白萬綠團中月一團

西村茂樹

泉源長有春温煥是其性山如待吾遊天教除吾病

小野湖山

飽食過眠頭痛戒風寒雨濕用籠防飯前服藥浴後歩此是浴時喫餐方

谷 恕意

人稱鑛脈含鹽分吾信衛生占最佳豈獨澡泉醫俗骨且欣湯質和助骸

揖取素彦

粥腹も四萬の薬師の御かけにてこは飯さへも五杯六はい

品川彌二郎

浴泉記略 (代人)

盖毛之野、温泉甚多、草津伊香保最著、非其效不驗、然主治專于一病、是以毀譽亦無常、

獨四萬泉之良、百病莫所不可、特宜羸弱人、大氏羸弱人、其腹有積聚結痰、而此泉能消化

精聚、融和結痰之變、其症無數是所以治百病也、且夫泉之成湯、非礬礬、則硫黃爲之根、

是以臭氣撲鼻襲衣、飲之澁滯不利人也、唯此泉、潔白清徹、無有臭氣、其味鹹而甘、飲之

多々益人、湧源沸然、鹽凝成花、可以烹肉淪卵矣、嘗游此地、宿儒老醫、號稱海内無双、

非妄誇我弊帶也、如此不翅、他方之泉皆是浴、獨此湯有蒸法、是其效所以殊異也蒸浴之法

、乃有訣而存、其概以漸爲要、始至之日、不欲遽浴、一日二日唯浴干槽、二三次、自汲灌

頂上數十遍、稍加至百餘遍、三日以後、始入蒸室、先灑湯頓處、平心端座、如對貴人、如叩頭狀、以蒸頭顱上、不得瞑、不得臥、久座爲妙、若瞑則不利干眼、臥則癢辟動搖、皆有害、其初座室、一伏時一霎時、強弱自裁焉、出室而飲湯一兩口、復浴干槽、灌頂如初、浴後速更浴衣、切戒假寐、寢則冷入邪隨、非徒不能治疾、陰釀巨害、其他在浴時、不飲冷水、不食冷物、凡生菓食、皆不宜、且禁房事、忌服藥、灸唯三里一穴不妨、若療詩痔、別驗小屋、以蒸患所、大凡浴者、胸腹快豁能食、固其宜也、五六日後、或下利或腹痛、亦治設也、罷浴一二日、自然而癒、若其全功、必待十餘日後而見矣、故將息法、亦以薦數爲限、薦多將息亦如其日數、其際不宜浴常湯、灸必待二閱月後焉、是爲入浴要略、如其小節、請待口授而已、蓋是我土古來相傳之訣也、吾儕不敢增損、謹錄所聞、以告四方來顧君子、若夫山川勝概、自是游者之雅致、自己在山廬中、其復何言、壬寅仲夏一日、鄉人田村清民撰、

(著者云此文最善く温泉の狀況入浴の法を詳説す文も亦可見)

遊 四 萬 温 泉 記

余與伯經遊四萬溫泉、雖曰烟霞、亦無疾也、地癖而山水不甚奇、其後何記、二人試浴三四日、泉性頗慣、夏日無事浴法切忌宰我氏之好、浴後駭々然、將墮睡魔者數四、遂相警勉強以記耳、蓋四萬之溪、在山田川上游、而距高崎治百里許、山田里以東、泉之成溪十有八里傍溪而家焉、家之房如水澗、屬干湯槽、以待來者湯泉之成業、亦皆爲然、獨四萬之泉、別有蒸室、而治驗亦在蒸浴、其矮屋數間、架之屋下、其室三四相連、小於維摩之居、而病者默座、寔容四萬之衆、而不狹、但座下與焦熱地獄、僅隔一箔、是以不能久座、唯獮獠亦具佛性、故能堪久、如余爲理障所遂出耳、又入又出、心猿兔躁、余室中與伯經語曰、嘗聞賦忠彌責問不拱、獄吏布青竹於火上、騾座其上、何太相似、吾曹果首何事、伯經胡慮不能答、遂出日々謔浪、猶恐睡魔窺隙耳、已而余二人與隨跟、亦皆健食日加、應知妙皆無量之方便、順逆不二也、余之足西履長崎、東北抵蝦夷之地、其際所經、湯泉甚多、不能詳記、然如四萬蒸湯、未之有也、先余遊者、或紀山川風土、或錄治驗所試、其言曰、香太沖以城崎爲稱首、未知有四萬也、然其稱四萬泉根干乳石者、乃阿好之說、不足據也、余與伯經一日登水晶山、尋所謂乳石所產、殊不如其言也、但山之石生水晶、閃々如鍼如棘刺、一拳一塊、無石不然、纖微如毛、亦必圭頭六面、寔性也、疊巒重嶽、苗乎百里外、簇々無見無際、

澗水發流幽谷、滿漉泉澗、日夜不休、惟此深山不出龍蛇、其氣鬱結、溫泉以涌、成蹊成村、其戶數十余、其口數百余、含哺鼓腹、各樂其生者、豈復偶然哉、余與伯經游、雖曰爲疾、亦惟烟霞爲崇耳、伯經乃命石工、勒題名并一小詩於溪石、因戲打之、石肌麻起不成字、乃笑而措、其他他畫作字、吟咏以消閑、五月五日、再薦滿、賒酒相賀、厥翌冒雨而發、

各分析表及効能

太田雄寧が米國シンシナタ州醫學教授ウアルトンの著せる溫泉論を原として著述せる溫泉論(五冊にて明治七年の出版)三卷の附録に該四万溫泉の分析表あり、左に示す。
溫泉論卷三附録

上野國吾妻郡四万村鑛泉分析表

左の成分は一リートル中に含有せるものあり

格魯兒曹胃母 一、四五四〇ガラム

格魯兒剝篤亞叟母 〇、二六二〇ガラム

硫酸曹達 〇、二九四五〇ガラム
硫酸剝篤亞叟母

硫酸加爾基 〇、二八三七ガラム

硫酸麻僞涅失亞 痕跡

珪酸 痕跡

磷酸 〇、〇六一九ガラム

第一格魯兒滿菴 痕跡

此泉の主成分は格魯兒曹胃母。硫酸曹胃母等にして。解凝、變質、催下、制酸の能力あるに因り左の諸病に効あり、

胃弱、消食不良、貧血症、肝臓病、習慣の便秘、

右之病は内服して効を得べし、

但し服量は毎回一盞より三盞に至るべし、

慢性皮膚病、頑固癩麻質私、脱臼、挫傷に由て生ずる四肢關節の痿痺、

右之病者外浴して効を得べし、
神經痛

右の病者内外服用して効を得べし

但服量前に同じ

とあり又内務省衛生局にて出版せる日本鑛泉誌(三冊本)二卷目には左の如くあり、

日本鑛泉誌卷二云

四万温泉 (吾妻郡四万村)

新湯、山口湯、日向見湯、

○泉質 鹽類泉

新湯、無色透明無臭にして弱き鹹味あり、其反應は亞兒加里性にして、一リートル中
固形分、二、四八〇九瓦を含有せり、其各成分及分量左の如し(岩根湯を分拆す)

格魯兒那篤留母 一、四八九一瓦

格魯兒加留母 〇、一三四九瓦

格魯兒麻偏涅叟母 〇、〇二一〇瓦

硫酸加爾叟母 〇、五八六五瓦

硫酸那篤留母 〇、一三七三瓦

鐵 痕跡

固形分合計 二、四八二五瓦、

山口湯、

各成分略新湯に同じ、

温度百三十一度より百四十度の間にある、

日向見湯、

無色透明にして含有せる所の各成分及量左の如し

硫酸加爾叟母、大量、硫酸麻偏涅叟母、痕跡、

硫酸亞酸化鎂、痕跡、硫酸亞兒加里、少量、格魯兒亞兒加里、少量、

固形分合計一、〇九五瓦

温度百三十二度にして比重は攝氏十七度の温に於て一、〇〇一五に居る』
とあり、又明治八年獨逸の博士ケ、マルチン氏の「リートル」を分析せられたる表を見るに
左の如し、

泉質鹽類泉

新湯源泉温度、百六十度より百八十三度

山口源泉温度、百三十一度より百四十度にあり

無色透明無臭にして鹹味あり、其反應は亞兒加里性にして「リートル」中固形分二、

三五六一グラムを含有す、其各成分及量左の如し、

食鹽

一、四五四〇、

コローム
カリウム

〇、二六二〇、

硫酸加里
硫酸曹達

〇、二九四五、

硫酸加兒基

〇、二八三七、

硫酸

痕跡

珪酸

痕跡

磷酸

〇、〇六一九、

第一コロー
ルマンガ

痕跡

フローム

跟跡

有機質

跟跡

総量 二、三五六一グラム

効能

慢性皮膚病、頑固癩麻質斯、腕臼挫傷に由りて生ずる手足關節の痿痺、神經病、胃弱、
消化不良、貧血症、肝臓病、紂憤の便秘、疝痛、子宮及び膣の加答留、月經不調、
とあり、去れむこれを参照して各々其病症を治療し玉ふべく、特に多年の經驗に依れば頑
固癩麻質斯、慢性皮膚病及神經病、胃弱、子宮病、月經不調の如き、十年の永き年月病苦

に腦める者と雖、遅くも二週間を出ずして全治するといふ、まことに効能偉大なりといふ
つべく且つ他の温泉の如きは多くも二三の病症を治するに過ぎざれども此地の温泉は如何
なる病症に浴しても効を奏す眞に比類無きの泉質といふべし

温泉入浴心得

醫學上より論じたる諸種の温泉論及醫學治療法等及この温泉の性質心得等を参照して、入
浴者の心得とも成るべきことを左に掲ぐべし

一、浴泉の温度は病症に依りて高度のものを用いる事ありと雖大抵華氏寒暖計の九十八
度乃至百度迄を最摘宜とす、若し其熱度之より過度ならざるに俗せんと思ふとも決
て常水を混じて一時に温度を下ぐべからず、止む無くば長く放冷して適度に至るを
待ちて入浴すべし如何となれを常水を混するが爲めに藥氣を稀薄ならしめて、何の
効用もあらざるに至るべし

一、浴數は老人一日一回少壯の者は一日三回を適度とす、世の人やしもれば入浴の回
數多き程効能あるものゝ如くいひども決して然にあらず、却て血液の循環を狂はせ

て身體を損ふものなり心をべきことなり、尤入浴の時刻は朝夕を宜しとす、

一、内服の量は大概一日一盞より五盞に至るを善しとす、而して朝夕兩度空服の時服す
るを法とす、其温度は華氏寒暖計八十五度を過ぐべからず、若し一回に二三盞を服
せんと欲する時の先づ一盞を飲み盡し又運動して後盞を擧ぐべし、

一、服後は朝夕共三十分時間を経過せざれば食餌をべからず、

終はりに明治八年此温泉場に建てたる製札あり其文左の如し、これ入浴諸氏のため心得
ともなるべしやとの婆心あり讀者諒せよ、

製札寫 覺

一當温泉に脇より障り申間敷候事

一火之元致大切別て湯治人大勢入込候時節は益夜番人相過等閑にいたし申間敷候事

一村方之者は勿論湯治人共博奕並掛之諸勝負堅爲致申間敷事

一湯治場之儀は都て病人入込候事に候へば喧嘩口論總て狼籍成儀爲致間敷候事

一隠遊女躰の者差置間敷候事

一湯治人に紛盜賊の類其外胡乱なるもの入込候は、村役人湯宿は不及申惣百性申合怪敷躰に相見候は、捕置可申出候事

一湯治人に對非分之儀決て申掛間敷候事

右之通可相守候也

明治八年卯八月

野田彌市右衛門
蔭山外記

四萬温泉紀行 (附録)

花笠庵主 翠葉

戀に瘦せ戀に死せるは松浦の姫が望なり、旅に瘦せ旅に死せるは西行か理想なり、去りとて余輩は西行か理想をまねび、松浦の姫か望を願ふにもあらず、只た凡庸に免れざる現實の境涯に愉快と満足とを索めんかため身を一簑笠に包みて仙に遊んとし塵を脱して幽に入らん事を欲す況や理想は遂に行ひ難く望は達し難きに於てをや噫余輩は到底現實の範圍

に甘むぜざるを得ざるの俗物か、雖レ然理想必ずしも行ひ難きにあらず、望到底達せざるにもあらざらんか、上野國四万の温泉は東京を去る北殆んど四十里にあり、いにし田村磨か發見せるところにして神祇伯顯仲等之を賞し翠嶺屏を爲して水青く澗水潺々として山谷に響き真に一仙境を形造れり詩神宿り天女棲む豈一遊せざる可けんやとは是温泉主田村茂三郎氏か昨秋より余を招くところなり茲に於てか理想と望とは幾多の俗事に打勝ちて遂に親友回天と俱塵の都をさうはれ出ぬ、理想と望の今や達せんとする事の嬉れしさと愉快さは幾許りぞ、能因か白川の歌ならねど都も既に秋風が吹く、北へ北へと進む余等、寒さも如何ならんど心措かれぬらぬ衣も重ね着して九月十七日の夜八時江戸川のほとりの我庵を立出で牛込停車場に着きぬ、けふは終日降しきる雨に自ら寂寞の感胸にたゞ別きて柳櫻の枯葉二つ三つ秋風にあほられて水も誘はれ散り行く様何づれあられならざるは無し、氣笛一聲を後に残して早や余等は都の人にあらずなりぬ黑白も別かぬ暗の夜をほのかに燈火の點綴せるは市ヶ谷士官學校とや幾多の荒吳男が豪傑と氣焰万丈なるものあらん、四谷を過ぐれば隧道あり茲は畏くも皇居の地下とさく、去るからに何と無ふ恐れ多き心地し

ぬ、信濃町を過ぎて新宿に至り茲にて二時間を待ち暮らして大宮行の氣車に乗り、前橋にて今宵を明かさんとすれば、瀛車は前橋迄行かずとの由に、詮方なく大宮に至りて、一泊しぬ、雨はますますふりしきり寒さは肌を犯して粟を生じ終夜憂たてく假寐する内に何時しか東の空も白ふなりて夜はほのぼのと明け初めぬ一番列車に乗らんとて茲を立ち出で停車場に至れば早や出發の時刻なり、急ぎ乗りて前橋に至らんとす桶川、鴻巣あたりに來れば軌道の傍の小松原に招ぐ尾花、由縁の桔梗露になやめる女郎花、誰がぬぞすてしか藤袴、さては野蕨の咲乱れたる、目のうつるところ總てあはれならざるはなし、遙彼方の木蔭に草刈る童あり

草刈らば心してかれわらべらよ秋の七草今さかりなり

道の此方に獨り突然として立るは石地藏なり、嘗て文友泉鏡花氏余に語るらく青年小説に挿さめる、雨がふるおほきにさふい酒飲まう何もなければ豆腐でも買へ、是狂歌にあらず歌にあらず去りとして川柳にもあらず是一新機軸を出さんとせるものなりと、余此事を思ひ出でく直ちに句あり、

秋風寂寞已が有ありと觀念かはや石地藏

是鏡花に於けるが如く誹句にあらず狂句にあらず亦和歌にあらず回天以て如何とすと回天答ふらく或はよからんと余大に其言の多ならざるを怨む、或は茄子のあはれに葉がくれたる早稻田のみのりたる苧穂なす時も近きにあらん襪縷を身に纏ひ破笠をかふりて野中にたてるは案山子なり

これかろがうちが時代ぞ任務も重し案山子

殊更に俳句をなさんとして失敗せるは

秋茄子一雨ごとに小さうなる

露はあはれにも亦いみじきものなり或は女郎花に宿りて傾城のをやめるが如しとうたはれ、朝顔にやどりての花と共に果敢無きを悲まれ、或は蓮、芋の葉に轉して其もろきを知ぬが如く、或はあざみの花に宿りて針持つぬしをいとはぬがごとし、露にまれ花にまれ秋のあはれは田舎に及くものはなし、やがて瀛車はしらす進みて午後一時前橋につきぬ、

因云、この前橋に就きて歴史上より考ねんとおもは、前橋風土記

〔序〕貞享元年九月二十八日儒官臣古

市剛謹奉とあり即ちこの人の撰なり』を始め橋林寺所藏の道賢眞蹟附田之帖、及關東古戦録及同考其他上野國志、上野名蹟考、及種々の舊史雜書等を見ればおもしろく考證するを得べけれど茲に必要なければ省く、只だ便利のために名ある旅店茶亭名産などをあぐれば休憩處にはステーション前の鐵線亭榮吉、臨泉樓田所かつ、旅店に松坂屋藤七、油屋安太夫、白井屋銀次郎、住吉屋國太郎など、茶亭には赤城亭(西洋料理をもかぬ)全支店、名産物にはしきしま河原せんべい養鷺をこしの富貴堂、十景せんべいの松露庵、及龜田屋、片原饅頭の野村及しまやなどす』

ろれより徒歩して今夜は澁川にて一泊せんとして久方振りの田舎旅、さぐや嬌味もあらんとて心もいさみ立ち出でぬ、町のはづれに鐵道馬車あり乗りませと馬丁のすゝむる聲もいさまし、澁川迄賃錢は十八錢とぞ、このあたりは名にしあふ生糸織物の盛なるからに雨漏る伏屋菓子ひさぐ軒にも糸繰る賤の女の鼻歌や、機織る乙女の都のはやり歌くりかへしく、謠ふも可笑し、彼方に建てるは氣象臺なンめり、遙か東北の方に屹然と聳ゆる山は妙義山とかや、前橋を立ちて二里許りも來にけんとかもふに桃木橋といふがあり奔流岩に激し轟

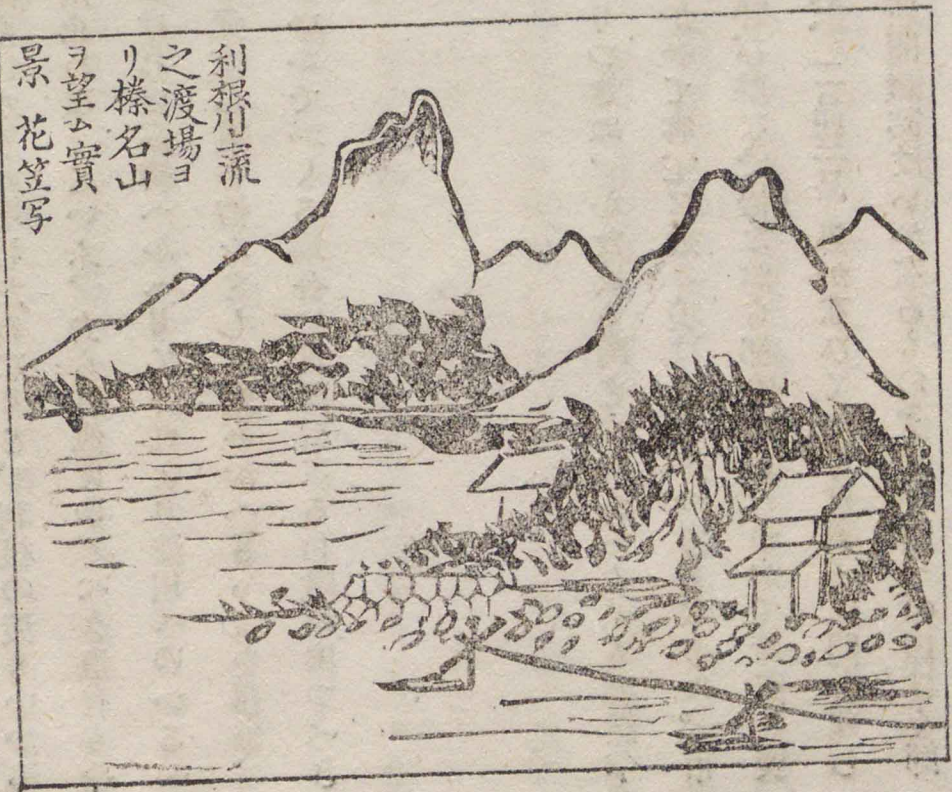
々として百雷の吼ゆるが如し、是永日の降雨に水層の増したるなりと、利根の渡もいかゞあらんと心許ならず村人に問へば笑止や川止めなりといふ、去らば他にゆくべき道有りやといへばあれども橋は皆流されたり、詮なければ高崎へかへりてそれより澁川へゆかるへしと、こは意外の又絶望とわはれや已等は元來し道を悄悄として踏みかへさざるを得ず、茲に於いて一句如何にと回天の颯ぶれど、いかでかゝる場合に眞面目なる和歌の出つべき狂歌ころ善けれとさろくに

桃木橋くやめとかひは泣くばかり

渡る瀬もなくかへる勢も無し

やうく前橋なる堅町といふ住吉屋にたどりつきぬ、かたはら町とはかへをくも偶然乍らに片腹痛き次第あり、宿の者の案内に任かせて客室に通る項は早や夕つ方となりぬ、市中皆爛々たる電燈をともし牛肉屋の下婢の呼び聲など恰ながら都の如し、やがて新聞の賣子にや新聞はいかに雑誌はいかにとすゝむ、二品三品あがなひてかくは賣子に問を起しぬ、中學の學生と師範の學生とが嗜好する新聞雑誌はいかなるものぞと、賣子の曰はく師

範學校生徒は多く講義録を取り文學的雜誌の如きは悉無の如し特に新聞の如きやうやく讀む者は日本、讀賣の購讀者數人に過ぎざるか如し、中學生に至つては、や、異色あり講義録の如きを讀む者絶て無きか如く雜誌は中學新誌を最とし、早稻田文學、之よ次ぎ其他帝國文學、大陽、文藝俱樂部、新小説の如き皆嗜好しつゝあり、新聞紙は讀賣、日本、國民、毎日、何づれを多となさず愛讀するが如しと、以て學生の未來を卜するに足りなんか、此家に二夜を明かし十九日正午今度は馬車にて澁川に行き中ノ條にやとら



利根川流
之渡場ヨ
リ榛名山
ヲ望ム實
景花笠写

んとて立出でぬ、二時といふに利根川の渡しにつきぬ、村の名を北橋村といふ、茲にて馬車より下りて川の岸邊にたちて四方の景色を眺むれば、前には名にしあふ利根の奔流、或之岩に激して白露飛び或は渦巻きて水藍の如し、彼方には榛名の峻嶺巍峨として雲間に聲に、此方には萬仞の懸崖、瞰視をれば魂慄ひ魄戰く、もしうれ一條の綱にたよりて激流に逆ひ船を横斷らんか、此間の風景、到座筆にも書にも盡し得べきにあらず、今や渡しの人を渡げん船頭と呼べと中々に應答なり、おりから川風寒ぶくあはれに啼くは千鳥とかや渡し守呼へといらひはあらずして川風寒く千鳥なくなり

川を渡りまた馬車に乗りて三時といひに澁川町に着きぬ茲より徒歩して中條に至らんとす、道程五里とさく、人車賃は七拾五錢にて乗合馬車賃は六拾錢なりと澁川の町を過ぐれば吾妻川あり源を鳥居峠に發し東流して群馬郡に至り利根川に會す、山間の川流多く急ありと雖もまたと無き計りに急流なり、吾妻橋を渡りて西北へと進めば道は廣く平垣あり、吾妻川を左に見遠く白根淺間の連山を眺め右に鳥居峠を望む往昔かしくも尊の東征したまひての歸るさに吾孀者耶と歎かせたまへし嶺としをもひはいともく忍ばるゝ、澁川を去り

て三里計りに小野子とこふ洞口あり、懸崖絶壁天を摩するが如き山の麓よわづかに人車を通すべきの洞口にして茲を出づれば懸泉數十丈の高きより直下し左岸には吾妻川の流聲を幽かに聴くべし、これをすぎて半里許りに岩井戸といふ奇山あり、怪石奇岩突如として秀で、或は躍龍の如く或は舞鳳の如く或は仙人の息ふがごとし、翠松其間に點在し岩面皆苔蒸して特に黒斑を點するものは皆岩松なり、山の裾に些やかなる佛閣ありて觀世音を安置す、是よりいよく足をすくむれば日は將に西山に傾ふかんとし吾妻の川面の夕景色も一と入なり、をり

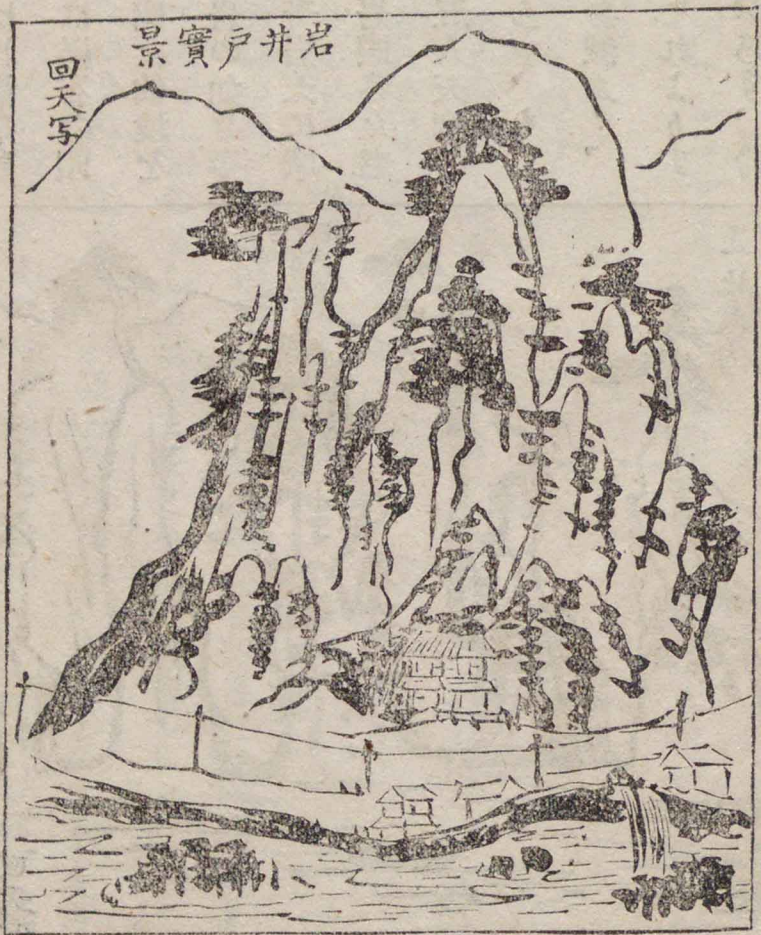


小野子洞口實景

花笠写

から筏士の筏を下だすに會す、岩根をよくるあやうさは實に名狀すべからず
吾妻川下す筏士いかにして

恙なく岩ねよぎて行らくん
夜の九時過ぎ中ノ條に着ぬ人口
三百もあらんか旅宿のよきは二
た宮との案内に委かせて宿とり
ぬ、特別といふさしきに案内せ
られて見れば室の様床の風をど
實に鄙珍らしき作なれど、下婢
の無禮なめげなると夜具のうすきひく
にも被るにも二枚なるはふさわ
しからぬ事共なりかし、翌くる



岩井戸實景

回天写

朝五時といふに宿を立出づ、四万迄は道程四里八丁なりと人車賃は六十錢なり、道は漸々

と高きに上げれど人車も馬車も通すべし一
 歩々々進む毎にますます奇山現はれ清泉聽
 じ或はバツタリてふ水車あり或は巖石の頭
 上より彼岸に橋を架したるなど幽に仙境を
 行くが如し、中にも五社天狗の岩の如き平
 岳より突兀として高さ數十丈の奇岩天に摩
 し如此もの都べて五個整列せり岩頭各々老
 松一株あり里人曰はく是嘗つて五人天狗の
 棲みし處今以て寸尺の草木を折らず、もし
 これを犯かすものは忽ちにして身滅ぶと、
 さなきだに神々しき心地しぬ、これよりす
 みて二里計りに妻戀橋といふがあり、鈴
 蟲のあはれよあきければ



妻や戀ふ橋のたもとののはがくれに聲ふりかねて鈴虫のなく
 橋を渡れば彼方の山の経路より六十路ばかりの媼の、身もたわむばかりに薪背負ふて來る
 又逢へり四万迄は里程はいかにと問へばしわぶきしつゝ、半里計りなりといふ、いかにもあ
 はれにいみじかりければ例の歌を

やれ氣の毒あどぼくと薪背負ふて媼行く

新湯川に架したるなにかしといふ橋を渡りて杉木立の一とむらをすぐれば道の傍へに萩の
 花盛りに咲けり一枝をらまくほしけれと遂に止みぬ、

折るも憂しをらぬも惜し萩の花去りて露になやめるものを

やがて彼の媼のいひし道の程に四万温泉場といふ標札あり日頃の理想と望とは此標札によ
 りて早や幾多の満足と愉快とを以て達せん事の嬉しさは何にたとひんやうもなし、正午十
 二時といふにいよ／＼四万温泉場につきぬ、温泉主田村茂三郎氏出で、われらの二人を迎
 へて、あざやかなる一室に案内して種々の饗應にわれ等の旅の疲勞をなぐさむ、やがて愛
 子求女氏をして浴場に案内せらる、ともに入浴しつゝ、くさ／＼の物語りす、氏は夙も慶應

こしを出でし右の小經をたどり、新湯川を渡りて坂を登れば一小岡上に茶亭あり、四邊柳櫻、楓を植ゆ、ことよ秋の紅葉は尤佳しと、これ運動場にしてうれより道を右にとりて坂を下り橋を渡り、また坂をのぼれば、薬師堂あり、元和年間の草創なりしか、元禄七年火のため鳥有に期し全八年に再建したるものなりと、四方の眺め高爽にして、水昌山は高く左に聳へ温泉場は一日に瞰下すべし、秋の紅葉の錦は更也、春の眺めも殊更らに鳥の啼く音も幽かにて心神を慰むるに最も善く、況して靈泉混々として誦き出つるなど如何ある病も治するなるべし此處を下りて右に回はり左へ行けば田村氏の別荘清心館とす館は四萬川に沿ひ前に河原の湯を望み後に水昌山を眺めて各室何つれも美麗清酒にして電話機をうあへ且つ新聞の縦覽所あり湯風呂合せて七個なり、

こしを出でし北に行けず即ち日向温泉道にして小倉瀧、摩谷瀧、蠟石山等の名所あれと早や日も暮せんとする故、明日を期し、今夜は諸舊記を展覧することしなしぬ、(以下畧)
一風景の絶佳なる恰も仙境に遊ぶが如きは宜しく寫真版を一覽して推知せらるべし

四、萬温泉の名所及名産

松杉鬱蒼として路苔蒸せるの所、試みに足の向ふに委かせて行き見んか、幽更うに幽に一歩愈々近づくに従つて、轟々雷の吼ゆるが如く、おもはず快哉を叫ぶと共に心神爽かなるを覺ゆるものは、これ、小倉、摩谷、はしご等の瀧なり、巍峨峻峯として高く聳へ、壯者健脚を揮つて、頂上當代の英雄を氣取るによきは、氷晶、蠟石等諸山なり、或は水色藍の如き新湯川邊に襟袖を開いて涼と取るも可なるべく、或は鳥囀の所薬師堂に腰うち掛けて四萬全景を瞰下すも面白からん、其他月に花に紅葉に雪に、周遊の興四時盡るの時無し而して此地古來より名産多し、入浴の歸へるさ、家のはなつと、なさば一入の興味あらんか

新湯川カヂカ

わうび

氷干飯

氷干餅

氷蕎麥

舞茸

ロクロ細工

新湯酒

椎茸

THE HOT-SPRING OF SHIMA.

This famous hot-spring is situated at Agatsuma County, in the Province of kozuke, to the northwestern portion of the Gunma prefecture. The name of the place has been well known from ancient time both for the excellent efficacy of its spring and for the beautiful sceneries which surround the place. It lies about forty ri to the north of Tokyo.

To go there, a traveller has to take the first train at Uyeno to Mayebashi (or Takasaki), whence he may go on to Shibukawa by tram-roab, and from there continue his journey by Jinrikisha or on foot as he pleases' then he will be at Shima on that same day. Even if he failed to take the first train at Uyeno, he will be able to get there early on the next day by stopping the night at Mayebashi (or at

Takasaki).

(1qa)

From Mayebashi to Shima, we rather advins the tsaveller to go on foot, though there are Conveniences of taking both Jinrikisha and Stage-coach, for his passage lies amid af the beautiful sceneries which are never to be seen in elsewhere, so if he prefer Jinrikisha or another Convenience he will lose the pleasure of enjoying those sceneries enough.

The following is the analytical list of the constituents of 1 litre of the spring (examined by Dr. keh. Martin of Germany on the 8th year of Meiji).

The investigation made by the Sanitarybureau of the Home-Department proved that the spring is af saltic kind, is colourless, transparent, inodorous and has a Alkaline reaction, Containing 2.3 561 grams of solid matter per 1 letre.

The temperature of the spring—180°—183°

ANALYTICAL LIST.

| | | | |
|--------------------------------|---------|--------------------|---------|
| Sodium Chloride | 1, 4891 | Potassium Chlorate | 0, 1349 |
| Magnesium Chloride | 0, 0210 | Calcium Sulphate | 0, 5894 |
| Sodium Sulphate | 0, 1137 | Iron | Trace |
| Total of the solid Constituent | 2, 4852 | | |

MEDICAL ACTION.

Dyspepsia; Weak digestion, Liver diseases; Habitual Constipation, Chlorotic skin diseases; Porettic joints due to dislocations and sprain; Irregularity of menses; Indolent ulcer; Uterine and Vaginal catarrh; Anemia.

The most excellent hotel suitable for foreigners is Sairyo-kan and Sheisin-kan owned by Mosaburo, Tamura.

The hotel has a very excellent cuisine for both foreigner and Japanese, and commands the most magnificent View of the whole Sceneries of the vicinities.

Foreigners Will have no difficulties in getting their daily necessaries, as there are will very many shops of every kind in the vicinities of the hotel.

明治三十一年五月十九日印刷

明治三十一年五月廿二日發行

東京市芝區松本町廿四番地小林方

著者 石倉重繼

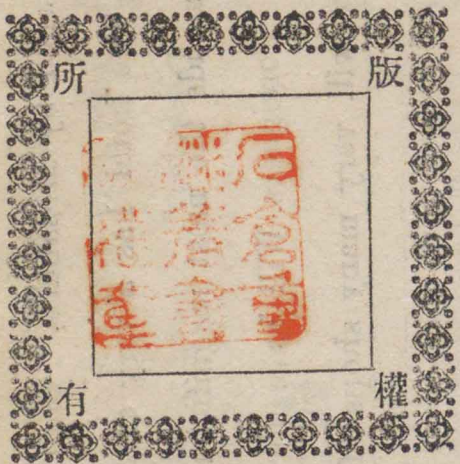
上野國吾妻郡四万温泉場

發行者 田村茂三



東京市芝區松本町拾三番地

印刷者 小林七尾藏



交通日に開くると共に當温泉の義も四方雅君の御好評を蒙ふり今や非常の繁榮を來し優し名聲海内に責甚たるものは偏に鴻湖諸彦の御厚顧と鑛泉の効能偉大なるとに外ならず就てハ聊か花客の御厚恩に酬はんがために諸事御便利を旨とし懇切丁寧の程伏て奉希望候也

四萬一等鑛泉

鹽の湯 岩根の湯

元田村茂三郎

草津温泉宿廣告

弊店は當温泉場の中央にありて壯麗清洒たる數棟の客館を有し専ら懇切と確實とを以て營業の本旨と爲す客室は清鮮なる空氣流通と四顧の眺望亦絶佳

草津温泉

大東館

山本與平次

内湯は清冽にして温泉は自由に爲すを得べく各湯室へ行くに尤便なり

温泉の効能道程物價等を知らんとし玉ふ君達には端書にて御通知次第速に當温泉案内記數部無代にて送呈す

川中温泉案内廣告

其泉質ノ善良ニシテ効能ノ顯著ナルハ今更云フマデモナク其位地ノ高潔閑清ナル其道路ノ平坦ナル又問フノ必要ナシ館主不肖ナレモ御愛顧諸君ノ鴻志ニ報ユル爲ニ社會事物ノ進歩ニ遅レザラントシ高尙優美ナル新館ヲ建築シ浴室ノ改築ト一人入り浴室トヲ設ケタレバ病患諸君ノ御入浴ハ勿論貴顯紳士方ノ御避暑等ニモ適スベキ様諸事改良御世話仕ルベク候間續々御來浴ノ榮ヲ賜ハリ度此段謹及廣告候也

上毛川中温泉場鳴鳳館

野口伊三太

從一位侯爵久我建通君題字 正三位子爵福羽美靜君序
正五位侍講本居豊顯君序 學習院教授關根正直君序
從五位鈴木重嶺君表題 季吟自筆寫真版挿入表紙四度刷

北村季吟

花笠石倉重繼著
寫真版石版附録附頗優美本
定價金三十錢
郵税金六錢

天地人 第三號評

北村季吟傳

石倉重繼著
松邑書店發兌

世に契沖、芭蕉を知らざるものなし而かも季吟を知るものは稀なり、季吟は浪華契沖
と東西相對して其當時文學の霸權を握りしのみならず、國文學の中興に與りて大に力
ありしなり花笠庵主人其傳なきを憂ひ且つ傳記の湮滅せんをとおられ之を傳ひんとて
ものせられたる之此書なり無慮二百六十頁餘渠が生涯を寫して精其文亦見るべきもの
あり吾人は其勞を多とすると共に文學者に一讀を薦むるものなり

國學院雜誌 第四卷第四號評

北村季吟傳

石倉重繼氏著
松邑孫吉發行

博覽強記而も自説を立て自ら高ふらす引抄考説極めて篤實なる著書を殘て契沖と相
ならびて徳川初世國文學の明星と稱へらるるものは北村季吟に非ずや、而るにその傳
散逸世知るものなし、これ斯學界の爲に慨すべき所、笠園石倉氏かねてこゝに見る所
あり、その傳を輯録して嘗て讀賣に出しか、今更めて修訂して一卷とあし世に公に
せるに至れり。一々古書記録によりて材料を求め、考證確實、涉獵該博に臆説妄斷を
狭まらず、これ自ら季吟の人となり適せるもの、極めて親切なる著書といふべし、近
來史傳の流行するにつれて、偉人傑士いづれもの品騰に上らざるなま而も多きは文
詞の末に走せて材料を後にし、無責任なる壯語を發して一時を快にするか如きもの、
之を本書に比するに雲泥の差異ありといふべし、されは其文の華なるとざるその語格
の誤り多き等の點は暫く之を嗽々するを要せじ。
此他讀賣時事兩新聞及日本人評一ペーシに踞る何つれも好評を博せしの書なり

發兌元 東京市京橋區弓町拾二番地 松邑三松堂

從二位伯爵東久世通禧君題

故文學博士正五位小中村清矩君題

從五位鈴木重嶺君題

著者 石倉重繼

前茨城縣知事正五位高崎親章君題

文科大學教授從五位栗田寬君題

佐々木信綱君題

櫻川事蹟考

やまと綴頗美本
表紙七度刷定價金二拾錢
特別割引郵稅共金拾五錢

早稻田文學 第百〇一號批評

櫻川事蹟考、櫻川は茨城縣常陸國西茨城郡西那珂村大字磯部にあり昔之吉野と並ひ稱せられたる櫻花の名所なりしに歲月の推移と共にやう／＼荒蕪に屬せんとするを慨し同縣人石倉重繼氏が晋く古歌舊記を涉獵して此の書を著したる也櫻川の源委沿革勝地風俗等を一々精叙したれば一讀して名地の大概を知るを得べし卷首には東久世通禧伯の題辭 栗田小中村など諸氏の序文をのせ卷尾には櫻川略圖を掲げたり風流士好伴侶云々以下略

帝國文學第十二號評

櫻川事蹟考

石倉重繼 著

此書は著者が 常陸國茨城郡なる櫻川の早く世に埋れたるを嘆じ廣く古への歌書を紀行文などに徴してつばらにその起源沿革などをしるしたるものなり。古來歌枕にゆたかなるわか大八洲國も此書によりてまた一の名所を増たりとやいふべき。時しあれば、言葉の花もかくりけり。うもれにし名のかをるはかりに

文科大學教授從五位栗田寬君題 從五位鈴木重嶺君題
從五位志賀重昂君序 花笠主人石倉重繼著

唐崎松里蹟考

唐崎松全景寫真版附錄
特別割引
郵稅共金八錢

花笠主人石倉重繼著

古來關東事蹟考

特別割引郵稅共

金 四 錢

古來名勝を以て世に持囃やされしもの、今は多く荒蕪に歸して遂に有名無實とあれり況や其事蹟に於てをや著者深く之を悲み多年是等の事蹟編著に心力を注ぐ右三書の如き亦其一あらんか世の風流を好み國粹を保存せんとするの同感の士ハ郵券を投せられよ著者は喜んで直ちに郵送すべし

右三書御入用の節は石倉重繼宛て郵券御遺一の事

活版印刷廣告 文玉舍

東京市芝區松本町拾三番地

四萬温泉入浴會道案内

岩代國

後越國

上

野

信濃國

國

鐵道線路
馬車鉄道
馬車鉄道
本年七月成功
馬車鉄道



群馬県立図書館



0296621-6

群馬県立
図書館
39178

國藏貳